

研究課題	がん患者の病いの経験によるライフ・プランニングの再構成
研究代表者	河田 純一 (人間学研究科 福祉・臨床心理学専攻)

1. 研究目的

がんになるとはどういうことだろうか。自らも膀胱がんを経験した医療社会学者のフランクは、がんのように重篤な病いを経験した人は、これまで自明視していた未来が閉ざされることを意識することで、「人生の価値について新たに見直すことを余儀なくされる」(Frank 1991=1996: 2)という。特にがんの場合、その体験のもたらすインパクトは、他の病いに比べて大きい(Frank 1991=1996: 3)。がんにならないければありえたであろう生活、ありえたかもしれない人生、例えば当たり前に通っていた学校生活、仕事、家族や友人・恋人との関係、それらを失う可能性に直面して(そして不幸にも失ってから)強く自覚することもあるだろう。

特に、「AYA 世代」(思春期及び若年成人期: 15~39 歳)のがん経験者など、比較的若くしてがんを経験した人の場合、学業、就職、恋愛、結婚、出産など様々なライフイベントと重なりやすい。このため、若いがん経験者にとって、がんになって以降の生活・人生をいかに生きるのかというライフプランニングの再構成は、大きな課題となる。

本研究の目的は、がんになって以降の人生が長期化する今、がんを乗り越え、あるいは治療しながら社会生活を送る人達が、どのように病いに向き合い、生活を送り、新たな人生を歩もうとしているのかを、「がんとともに生きる」当事者たちの語りをもとに明らかにすることにある。

2. 研究方法

がんのように重篤な病いは、それまでどう生きてきたのか、そしてこれからどういう人生を送りたいのかを、立ち止まって考えさせる(Frank 1991=1996: 3)。したがって、「がんとともに生きる」人々の語りを分析するためには、現在・過去・未来という語りの時間軸をもった視座が必要になる。本研究では、現代社会における自己アイデンティティを、絶えず自らを振り返り、再構成されていく動態的なものと捉えるアンソニー・ギデنزの「再帰的自己論 (reflexive self-theory)」(Giddens 1991=2005)を手がかりにがん経験者の語りを分析する。

フランクはまた、病いを生きる人々は、自分自身がその物語を語るのを聴き、他の人々の反応を吸収し、そして自らの物語が共有されるのを経験することによって学んでいくという(Frank 1991=1996: 17)。本研究では、自らの病いの経験について新たな解釈が生まれ、自己物語がまとめられていく場としてセルフヘルプ・グループ (self-help group: 以下 SHG) (伊藤 2013) に注目する。これまでの SHG 研究では、複数の SHG への参加が当事者に与える影響が十分に議論されてこなかった。本研究は、複数の SHG に参加するがん患者・経験者の自己アイデンティティが、それぞれの SHG に参加することでいかに再構成されるのかを、個々のグループを特徴付ける「共同体の物語」(Rappaport 1993) との関係に注目して分析を行う。

以上の課題を達成するための具体的方法として、本研究では、①がんの種類や治療の段階も多

様な「自称若手」がん経験者が集まる SHG での参与観察・フィールドワークを行い、②上記 SHG に参加するがん経験者へのインタビュー調査を実施した。加えて、本研究を医療社会学における「病いの語り」研究に位置づける上で、③ 再帰的自己論を用いた分析方法の理論的整理を行った。

① 参与観察・フィールドワーク

東京都内の喫茶店で年 2～3 回、週末の夜に開催されている「自称若手」のがん経験者が集まる SHG「M 交流会」において参与観察を行った。交流会では、質問紙を配布する他、交流会の様子や会話の内容等をフィールドノートにまとめた。あわせて、M 交流会参加者が参加する他の患者会、がん関連イベントでフィールドワークを実施した。なお、全ての参加者および主催者の許可が得られた場合に限り、内容を IC レコーダーに記録した。これらをもとに、各活動の内容や場の特徴、参加者の語りの差異に注目し分析を行った。

② インタビュー調査

インタビュー調査は、M 交流会の参加者のうち調査協力依頼に応じた 3 名（2019 年度実施分）に 90 分から 120 分程度実施した。インタビュー内容は IC レコーダーに録音し、逐語録に起こす際に匿名処理を行い、希望した調査協力者には内容を確認してもらった。分析には、MAXQDA を用いた。

③ 分析方法の理論的整理

ギデンズの再帰的自己論は、自己物語論を取り入れつつも、その自己物語の再構成プロセスについて十分な検討がなされているとは言い難い。そのため、実際の病いの語りの分析に用いる上で、一度いわば「方法論としての再帰的自己論」を理論的に精査する必要がある。そこで、国内外の自己論および自己物語論に関する先行研究の批判的検討を行った。特に現代の社会学的自己論における再帰的自己論の位置づけ、および、ギデンズの再帰的自己論の理論的背景を整理した。

3. 研究成果と公表

具体的な研究成果とその公表として、以下の学会での報告および論文（1）（2）、翻訳（3）が挙げられる。

（1）これまでの SHG 研究では、多くの場合、特定の SHG と参加者との関係に焦点が当てられてきた。しかし、調査を実施する中で、ほとんどの調査協力者たちが複数の SHG に過去に参加、または、今も参加していることが明らかになった。本研究では、慢性骨髄性白血病（CML）患者の男性の語りに注目し、彼が、CML の患者会から「自称若手」のグループに参加の軸足を移す過程を、それぞれのグループの共同体の物語との関係に焦点を当て分析した。その結果、ある SHG に参加し続けるか否かは、参加者が自らの自己アイデンティティと、その SHG の共同体の物語が前提とする「同一性」の間に、どの程度親和性を見出せるのかが関わっていた。このことは、2019 年 6 月に行われた「第 67 回 関東社会学会大会」において、「がん経験者のセルフヘルプ・グループにおける『共同体の物語』—『自称若手』がん経験者の交流会を事例に一」と題し口頭発表で報告した。さらに、それをもとに、日本保健医療社会学会へ論文を投稿し、現在審査を受

けている。

(2) 近年、AYA 世代のがん患者の SHG 活動が活発になってきている。AYA 世代のがん患者にとって、同世代の仲間の存在が、周囲とのコミュニケーションのみならず、就職、恋愛、結婚など、社会生活を送るためのロールモデルとして重要な存在であることは指摘されてきた（桜井 2019: 33）。しかし、調査を通じて、当事者の間でピア意識の前提となる「同世代」感覚と、公的な定義（15 歳から 39 歳）との差異が見られた。本研究では、AYA 世代から少し外れた世代のピア・サポートの場としての M 交流会の特徴に注目することで、若いがん経験者たちが認識する「世代差の認識」に注目し、ピア関係を成立させる要素を分析した。このことは、2020 年 3 月に行われた「第 2 回 AYA がんの医療と支援のあり方研究会学術集会」において、「「AYA 世代」を超えた「自称若手」がん経験者のピア・サポート実践に関する調査研究」と題しポスター発表を行った。

(3) グローバリゼーションの進行と、科学技術の発展がもたらす自己と社会の再帰性のさらなる増大に注目するのが、アンソニー・エリオットである。本年度は、エリオットの著書、*Identity troubles: An introduction* (Elliott 2016) 第 1 章の翻訳を石田裕美子・河田純一・三浦一馬・千歩弥生による共訳で、片桐正隆監修のもと行った。なお、同翻訳論文は、「アイデンティティ、個人主義、個人化—自己の 3 つの型」と題して、立正大学社会学会に投稿し、『立正大学社会学論叢』に掲載された。

最後に、本研究は、インタビュー調査に協力していただいた方々をはじめ、調査を快く受け入れてくれた各グループの主催者・参加者の皆さまの協力がなければ成立しなかった。改めて謝意を表します。そして本研究が、がん患者の実像を提示することで、日本社会が直面する「がんとの共生」を考える一助となることを期待する。

Elliott, A., 2016, *Identity troubles: An introduction*. New York: Routledge.

Frank, Arthur. W., 1991=1996, 井上哲彰訳『からだの知恵に聴く——人間尊重の医療を求めて』日本教文社.

Giddens, Anthony, 1991=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.

伊藤智樹, 2013, 「ピア・サポートの社会学に向けて」伊藤智樹編著『ピア・サポートの社会学——ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く』晃洋書房, 1-32.

河田純一, 2019, 「がん経験の中で再構成される自己アイデンティティ——ライフプランニングにおける就労に注目して」『保健医療社会学論集』29(2), 64-73.

Rappaport, J., 1993, “Narrative studies, personal stories, and identity transformation in the mutual help context,” *The Journal of Applied Behavioral Science*, 29(2): 239-256.

桜井なおみ, 2019, 「参照点の持つことの大切さ～AYA 世代のピア・サポート～」『第 1 回 AYA がんの医療と支援のあり方研究会学術集会 プログラム・抄録集』第 1 回 AYA がんの医療と支援のあり方研究会学術集会, 33.